



茗溪 かながわ

MEIHEI KANAGAWA

NO.2

発行 神奈川茗溪会（旧 茗溪会神奈川支部） 発行者 清水進一

平成 25（2013）年 6 月

「神奈川茗溪会」の 発展に向けて

神奈川茗溪会会長
清水進一（s四三教大数）



また、本号でもご紹介させていただきましたが、県内で行われている職域・卒業学科・年代等に応じた会合等も、さらに交流の輪を広げていただきたいと思います。

昨年九月に「茗溪かながわ」の創刊号をお届けしました。会員の皆様からは暖かい激励と期待している旨のご感想をいただき、誠にありがとうございました。

他県でも会報等を発行しているところもありますが、他県に負けない会報だと自負していますし、茗溪会理事や本部事務局からもお褒めの言葉をいただいたことをご報告させていただきます。

神奈川県の教員を目指す学生への支援を精力的に進めていますが、他に官庁や企業への就職希望者への支援も、今後、是非、取り組んでいきたいと考えていますので、協力いただける方のご連絡をお待ちしています。

私たちは、東京高師から筑波大学までのそれぞれ学んだ時の名称は異なりますが、茗溪の絆で結ばれた仲間だと思えますので、これまで以上に先輩と後輩が広くお付き合いをしていただければと念じています。

また、これまで総会へのご出席がなかった方々も、是非、今年度から気楽にご出席していただき、旧交を温めていただくようお願いいたします。

平成卒の若手達の 交流会が発足しました

第一回若手交流会の開催

「神奈川茗溪会の活性化の一助を趣旨とした若手交流会を平成二十四年十一月十七日（土）に、「横浜スカイビル十一階」大陸にて開催いたしました。

発起人三名で発足した若手交流会ですが、開催当日まで、「案内文だけでひとが集まるのどううか」と、日々、不安な毎日でしたが、心配をよそに平成年度卒業生八名に、お招きした神奈川茗溪会の三名の先輩を含む計十一名で無事交流会をスタートすることができました。

集まった同窓の業種、略歴は多岐にわたり、異業種交流会ともいえる盛り上がりで、話のネタが尽きることはありませんでした。



▲神奈川茗溪会から西塚氏と加藤氏が顧問として参加しました。



▲円卓を囲んで「平砂」など筑波の“専門用語”が飛び交い異様に盛り上がりました。

後半は、「追越」「平砂」「ピッグ井」等の懐かしいキーワードが咲き誇り、幾度となく学生時代にタイムスリップさせてくれました。筑波生活は、人生の中でもかけがえない貴重な経験であったと、そして、その感覚を共有できる同窓がいることのありがたみを再認識いたしました。

懐かしいメモリーの余韻がさめやらず、自然と二次会が企画実行されたことで一回目となる若手交流会が大成功であったことを皆様へ報告いたします。

最後になりましたが、若手交流会発足にあたり、準備段階から心温まる、ご支援、叱咤激励をいただきました神奈川茗溪会清水会長、矢野事務局長、西塚様、加藤様をはじめとする諸先輩方には、心から感謝申し上げます。

第二回も今秋に同会場で開催する予定です。ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。 発起人代表 乾 高章

神奈川で開かれた茗溪のつどい

初めて開かれた『若手交流会』（十一月十七日開催、一面で紹介済み）、十二月一日に開催された『茗溪会管理職等懇親会』そして三月九日の『桐心会』の様子をお知らせします。

桐心会

総会・懇親会の報告

平成二十五年三月九日（土）、「横浜国際ホテル」で「桐心会」を開催いたしました。例年に比べ若い世代の参加が多く、おおいに盛り上がりました。

「桐心会」は、神奈川県内に在住・在勤する「茗溪」体育の同窓で組織しており、毎年一回、総会と懇親会を開催しています。先輩から後輩へ「血は水より濃し」を合言葉に桐の葉の精神を受け継いでまいりました。

今年、神奈川茗溪会の清水進一会長が特別参加され、「これから茗溪会の組織強化を図っていきたい。皆さんのお力をお借りしたい」という、力強いエールをいただきました。また、「桐心会」という同窓会が何十年も続いているということに感心しておられました。

事務局としては、筑波大学出身の若い世代が少ないという課題を抱えています。今後、会の充実、発展に尽力していきます。文責 大石進（五六 筑体）

●桐心会名簿（平成二十五年三月九日桐心会事務局作成）によりますと、会員が三七二名。最年長は昭和七（一九三二）年卒、最年少は平成二四（二〇一三）年卒です。実に八〇年といった時の開きを有する組織の層の厚さに圧倒される思いです。



桐心会

- 会長 落信久
- 副会長 矢島博
- 事務局 大石進
- 幸田隆

茗溪会 管理職等懇親会

懇親会の報告

平成二十四十二月一（土）、「ローズホテル横浜」三階ロビーに、本会顧問の清水神奈川茗溪会会長と川田茗溪会理事をお招きして、三十一名が集いました。

次第は以下の通りです。

- 一 開会の言葉
- 一 児島義明 秦野曾屋高校校長
- 一 発起人代表の挨拶
- 一 坂本紀典 湘南台高校校長
- 一 乾杯
- 一 瀬木明 舞岡高校校長
- 一 顧問挨拶
- 一 清水進一 神工大顧問
- 一 川田孝一 桜美林大顧問

その後、歓談が続く中、退職により会を去られる西村宗一郎氏（前県立横浜緑ヶ丘高校校長）の歓送と教頭になられた山本聡氏（座間総合高校）、添野龍雄氏（平塚農業高校）の歓迎の宴となりました。

また、参加した四人の総括教諭が紹介され、熱いエールが送られました。

参加者の一分間スピーチが続き、恒例の『宣揚歌』が高らかに



歌い上げられました。大石進氏（現 体育センター事業部長）による力強いエールの中で、山崎紀彦山北高校長の閉会の言葉によって、会は盛会のうちに閉じられました。

文責 佐藤教道（五六 筑一人文）

◆この会のことと出会い

この会が、毎年十二月の土曜日に開催することとなったのは、完全週五日制になつてからです。から、それほど古い話ではありません。それまでは、定時制高校に勤務する方々に配慮して、十二月の第一日曜日と決まっていたと伺っております。

私が初めてこの会に参加させていただいたのは、今から十五年程前のことです。当時、伊勢原高校定時制課程の教頭でしたが、茗



餞別を受け取る西村氏

溪の先輩である生沼啓二校長（S四〇教大数）に誘われてのことでした。当時、校長と教頭が同じ茗溪出身というのはさほど珍しい事ではなかったようです。会場は、一九九〇年代までは『華正楼』の和室大広間が定番でした。百名以上を収容できる会場として、ふさわしかったのかもしれない。二〇〇〇年代にはいると参加者は六十名前後となり、洋個室で充分の広さとなりました。そして、「ここ数年は『ローズホテル横浜』に落ち着いております。退職なさる先輩への餞別は、やはり、華正楼の“月餅”のようですが・・・

この会の発起人会の会合は、大和駅南の料亭「岩手屋」の二階と決まっていたようです。その席で、「管理職等」の“等”の意味を初めて教えていただきました。行政関係の方々にも声をかけ、広く同窓の輪を広げていこうという趣旨であったと記憶しています。現在もその路線は受け継がれていると思います。文責 矢野正人（S五三教修農）

会員の皆様

神奈川茗溪会
会長 清水進一

神奈川茗溪会の総会と懇親会のご案内

青葉若葉のみぎり、会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のほどお喜び申し上げます。

昨年の総会にて、「茗溪会神奈川支部」から「神奈川茗溪会」へと、会の名称を変更させていただいて最初の会合となります。下記の要領で開催いたしますので、どうぞ、お誘いあわせの上、ご参集いただきますよう、ご案内申し上げます。

記

開催日時 平成 25 年 7 月 6 日 (土) 11:00～(受付 10:45)

開催場所 ローズホテル横浜(TEL045-681-3311)

●JR 根岸線「石川町駅(北口)」より徒歩 10 分 ●みなとみらい線「元町・中華街駅」より徒歩 1 分

日 程

総 会 11:00～12:00 宴 会 場 (2階)

講 演 会 12:00～13:00 宴 会 場 (2階)

演題:「震災から 2 年余―“復興”の名の下に何が進行しているか―」

講師:松館忠樹氏 (s43 教大文) ジャーナリスト、元 NHK 青森放送局長、元 NHK 文化センター仙台総支社長

懇 親 会 13:15～15:30 ボール ルーム (2階)

※当日、参加者人数により、会場が変更となる場合がございます。

懇親会費等 (当日、受付にて申し受けます)

一般会員 8000 円 (支部会費 1000 円を含みます)

新卒会員 4000 円 (支部会費 1000 円を含みます)

※本部会費 3500 円の納入も受け付けております。

出欠席につきましては **6 月 14 日 (金) までに、返信用葉書にてお知らせください。**

※ **支部会費納入のお願い** 当日参加できない方は、同封の払い込み用紙にて支部会費 (1000 円) を納入いただきますよう、お願い申し上げます。なお、ご夫妻で会員の方につきましては、案内を 1 通とさせていただきますのでご了承下さい (支部会費はお一人分で結構でございます)

*本会の名称変更に伴い、払込み用紙の払込先 (加入者名) も「神奈川茗溪会」とすべきですが、郵便局の変更手続きが煩雑で間に合いませんでした。「茗溪会神奈川支部」となっていますが、ご了承下さい。

○ ご不明の点は、事務局または、以下の地区委員までお問い合わせください。

事務局長 矢野正人 (s53 教院農経) 080-5410-9149 E-mail: yano@kait.jp

川崎地区【川崎市】

委員 西村宗一郎 (s51 教大植) 045-362-7010

委員 南 敏 章 (s52 教大数) 045-945-2086

横浜地区【横浜市】

委員 佐々木悦子 (s46 教大体) 045-784-0670

委員 望月 正大 (s51 教大数) 045-812-0281

横三・湘鎌地区【横須賀市、鎌倉市、逗子市、三浦市、三浦郡、茅ヶ崎市、藤沢市、高座郡】

委員 鈴 木 彰 (s49 教大地) 0467-52-5354

委員 瀬 木 明 (s52 教大応数) 090-1040-3612

平秦・西湘地区【平塚市、小田原市、中郡、足柄上郡、足柄下郡、南足柄市、秦野市、伊勢原市】

委員 細谷 俊一 (s47 教大生化工) 0465-77-2046

委員 井出真理子 (s47 教大英) 0463-71-1191

北相地区【厚木市、海老名市、綾瀬市、大和市、座間市、相模原市、愛甲郡、神奈川県外】

委員 大島 恵子 (s46 教大植) 042-715-0317

委員 本木 幹雄 (s50 教大体健) 090-3817-3402

めいけい探訪

近代教育発祥の地

昨年(2012)のことです。竹内巧氏(三〇教大哲)から、事務局長宛にお便り(十一月七日付け)を頂戴しました。以下のような文面でした。

拝復

日頃、会務の為に苦勞様です。

さて、先日、お手紙と『茗溪かながわ』(第1号)を頂戴しまして有り難く存じ上げます。この文書はなかなか良く出来ていて、読み応えの有る物でした。

ぜひ、身体の具合が順調でしたら、来年は伺わせて頂きとう存じます。

処で、一つお願いが有るのですが、師範学校の創立は明治五年八月と聞いていますが、御茶ノ水の橋を渡って、東京医科歯科大学の脇に、明治六年に師範学校が建てられたと、文京区が金属板で呈示して有ります。当時、旧暦と新暦の切り替えは明治五年(一八七二)十二月三日を明治六年一月一日として切り替えた由です。もし師範学校が十二月三日以降に創設されたとすれば、文京区が正しい事になります。十二月三日以前に創立された事になれば、虚偽の掲示になります。

一度、本部で検討して貰い、明治五年が正しければ、訂正を求めざるべきでしょう。勿論、最近その辺りを通る事は殆んど有りませんが、解決しているかも知れませんが、宜しくお頼み申します。

では、再開を楽しみとしていきます。

敬具

竹内氏のご依頼につきましてはすでに本部から回答済みとは存じますが、私自身、「文京区が金属板で呈示」しているものを見たことがございませんでしたので、確認させていただきました。

JR御茶ノ水駅東口を出て、本郷通りの聖橋を渡ると、右手に湯島聖堂、左手に東京医科歯科大学があります。大学正門手前に自転車が乱雑に置かれている舗道並木があります。その舗道際に樹陰の奥にひっそりと建っている。近代教育発祥の地「碑」こそが、竹内氏のおっしゃる「金属板」なのだろうと思えます。



近代教育発祥の地

湯島一丁目4と5 (湯島聖堂・東京医科歯科大学)

江戸時代、このあたりは学問(儒学)の府であった聖堂(孔子廟)の一部、昌平坂学問所(昌平黌)があったところである。寛政9年(1797)学問所の学寮、宿舎が建てられ、旗本や藩士の子弟を対象とした教育が施された。明治維新後、学問所は新政府に引き継がれ、昌平学校、大学校、東京大学と発展していった。明治4年(1871)に文部省が設置され、我が国の近代教育の原点となる施策が展開されることになった。当地には明治5年(1872)師範学校(翌年、東京師範学校と改称)が開校し、その後、隣接地に東京女子師範学校が置かれた。東京高等師範学校は明治36年(1903)に大塚窪町に移転し、後に東京教育大学(現筑波大学)となり、東京女子高等師範学校は昭和7年(1932)大塚に移転し、後に新制大学としての発足の折、この場所の地名を校名に冠し、お茶の水女子大学と称し現在に至っている。 文京区教育委員会 平成19年(2007)3月

金属板には以下の碑文がありました。

平成十九年三月とあります。今から五年前に建てられています。ひよつとして、この碑は新たに建て替えられたものかと考えました。竹内氏ご指摘の箇所が見当たらないからです。

文京シビックセンター二〇階南側の文京区教育委員会庶務課文化財保護係に問い合わせをしました。鈴木さんという女性が丁寧に対応してくれました。

近代教育発祥の地

湯島1-4-5(東京医科歯科大学)

江戸時代、学問(儒学)の府であった聖堂(孔子廟)の一部、昌平黌跡である。寛政9年(1797)現在地に学寮、宿舎が建てられ、旗本の子弟や全国から藩士の子弟が青雲の志を抱いて集まった、昌平坂学問所である。明治維新後、政府に引継がれ、昌平学校、大学校、東京大学と発展していった。明治4年(1872)に文部省が誕生し、我が国学校教育の原点となった。明治7年師範学校が設置され、この地に後の東京高等師範学校、東京女子高等師範学校が置かれたが、前者は明治36年大塚窪町に移転し、後に東京教育大学(現筑波大学)となり、後者は昭和7年大塚に移転し、後に新制大学として発足の折、この地名を校名に冠し、お茶の水女子大学と称し現在に至っている。

—郷土愛をはぐくむ 文化財—

東京都文京区教育委員会 昭和63年3月

昭和六三年三月に最初の碑が建てられていました。その碑の写真など資料を頂戴できないかとお願ひしましたが、「申請書をお出しただくこととなりますが」ということで、書きこむ事由が面倒と思い、あきらめました。

下の写真は、昭和六三年三月の碑です。左の文面は、文京区文化財保護調査員の町田氏に確認したものです。



「明治七年師範学校が設置され」とあります。『写真集東京教育大学百年』では、師範学校は、明治五年九月一日(旧暦七月二十九日)に開校となっています。

竹内氏はこのことをご指摘なさったのだろうと思いました。町田氏によると、平成十二年に銘文修正の記録があるとのことでした。修正の該当箇所は、文部省の設置年で、師範学校設置(開校)年ではありません。

町田氏の説明では、当時文京区で発行していた『史跡めぐり』の文章を使用したということですが、確証はないということです。

明治七年といえば、大阪、宮城の師範学校の設置に続く、広島などの七官立師範学校が設置された年でした。

解決はつきませんでした。が、愉しい謎解きのひと時でした。

文責 矢野正人(五三教院農)